

## 次の10年も期待する

14代所長 尾上守夫



私は生研には発足のときから昭和61年定年退官するまで三十有余年にわたりお世話になってきた。その間を振り返って見て、また私は現在産業界にいるが、外からやや客観的に見ても生研は大変すばらしい研究所であったと思う。創造的研究には開かれた自由な研究環境が不可欠であるが、生研は発足当初から講座制を廃して教授・助教授がそれぞれ独立の研究室を構え、また教官研究費の一部を供出して若い人の萌芽的研究を助成している。大学紛争の際に各大学で多くの改革案が作られたが、その好ましい方向のものは生研では実施済みのものが少なくなかった。

所長時代の想い出として大きいのはセンターの更新である。昭和60年に「多次元画像情報処理センター」の时限が到来して「機能エレクトロニクス研究センター」が発足し、次の年には「複合材料技術センター」に代わって「先端素材開発研究センター」が発足した。いずれも前所長始め多くの方々が周到に布石しておいて下さったおかげであるが、やはり内示を聞いたときにはほっとしたのを覚えている。

大学における研究は教育、研究の自由に根源があり、教官の自由な発想に基づく創造的研究が基本であることは言うまでもない。しかしそれがいつまでも孤立した研究にとどまるならば、日本最大の研究所の組織体としての意義が問われるであろう。かなりの研究室は将来の芽を生み出すために地道な研究を続けていい。しかし幾つかは結束して新しい工学分野を創り出して行くことが必要であろう。臨時事業とかセンターと言うのはそういう文脈でとらえられるものであろう。正直いって时限がつくということはこちらから望んだわけではないが、次のセンターを作るために先生方が優れた先見性、たくましい構想力を發揮されるのを見て、研究所としてはこういう緊張感のある作業はたまにはあってもよいではないかと思うようになってきた。これからも生研は広い視野に立って、世に先駆けて新しい分野を切り開いていくてもらいたいと願っている。

このように生研は既存の研究分野を守るよりは先導的研究を推進することによって新しい工学分野を創り出していくところが特徴であろう。そのためには質の高い学術情報を間断なく得ることが不可欠である。これらは研究者のみならず各界の人ととの密接かつ頻繁な交流によって得られるもので、生研が都心に立地している益ははかりしない。生研において多くの新しい分野の研究フォーラムが形成され、複数の分野の研究者の交流が活発に行われているのはそのあらわれである。このような形態の情報交換はデータベースや通信ネットワークがいかに発達しても代替しえぬものである。

最近日本も基礎的研究を強化しなければということがよく言われる。産業界に身をおいてみると、本当の基礎はやはり大学にやっていただくほかはないなと思う。ただ基礎といつても純理をいたずらにもてあそぶのではなくて、工学としての基礎研究というものがあると思う。白熱電球の黒化をさけるところから始まったラングミュアの界面科学の研究、固体増幅器への執念が花開いたショックレー等の半導体エレクトロニクスの研究などはその好例であろう。生研は産業界との交流、協力がよく行われており、また幅広い研究部門をかかえて学際的研究に対処できるので、このような工学としての基礎研究を是非やってもらいたいものである。次の10年生研のさらなる発展をお祈りしたい。